

ボストンで感じた世界との繋がり

Boston University School of Medicine

渡邊 励人

(大阪大学大学院生命機能研究科)

まだ博士課程の学生だった私は、修了後の進路について悩んでいました。留学には興味があるものの、実際の生活が不安である。このような当時の私と同じ悩みを持っている方に向けて、私の体験を書きます。

海外での経験はほとんど無いに等しい状態で、英語にも問題があるまま、博士修了の半年後に渡航しました。

研究室のあるボストン大学医学部周辺の治安は、日本では見られないほど、かなり悪いです。初日にPIであるMikeから、大学の南は危険だから絶対行かないように、と釘を刺されたほどです。その言葉通り、私は大学内に置いていた自転車が目の前で盗まれました。さらにバス内で乗客が喧嘩して、バスはパトカーに包囲され、警察に乗客が引きずり出されるということもありました。ざっくり『ボストン』と言っても、地域によって差があるので、現地の方と連絡を取るなりして、先に調べておくことをお勧めします。私を含めて多くの日本人が住んでいるエリアは、日本と比べて遜色ないほどに安全だと思います。

現在は、留学からちょうど半年くらいが経過し、研究室周辺の治安の悪さや、アメリカの生活全般にも慣れてきました。今なら、薬物中毒の人が叫んでいても、ビビることなくマクドナルドに行けます。ただし、英語の向上はまだ実感できておらず、非常に拙い英語しか話せません。それでも生きていくことはできるので、語学力が不安で留学を諦めてしまうことは勿体無いと思います。

研究については、まだ大きな進展はないですが、少しずつデータが出始めて楽しくなってきました。私達の研究室は、ポスドクが私だけの非常に小さな研究室です。それもあって、MikeはPIであるにも関わらず、毎日私と背中合わせで実験をしています。また夕方5時には、研究室どころかフロア全体から人が居なくなるのですが、それは私にとってかなり衝撃でした。

さて、まだボストンに来て半年ほどですので、この留学の良し悪しを決定することは難しいです。しかし、物事の見え方は変わりつつあります。最近、研究以外で知り合ったアメリカ人の友人の家で映画を見たり、また別の友人とは一緒にアニメイベントへ行きました。色々な人種の人が、黒澤明監督の映画に熱狂する様子や、日本のアニメのコスプレで大騒ぎしている様子を見て、私達の世界は繋がっているという事を強く感じました。そのお陰で、自分の書いた論文が世界のどこかで読まれて、議論されているということ、はっきり想像でき

るようになりました。そして、今この瞬間も世界中の誰かが、誰かに読んで貰うべく研究を頑張っていると思うと、自分を奮い立たせることができます。そういった世界との繋がりを感ずることができただけでも、この留学に大きな意味があると思っています。

最後に、大学院の指導教員である大阪大学の深川竜郎先生、メンターの原昌稔先生を始めとする深川研究室の皆様、また海外旅行の経験すらないままアメリカへ着いて来て働きながら私生活を支えてくれる妻に、心より感謝します。加えて、本研究留学を支援していただきました上原記念生命科学財団の皆様にも心より御礼申し上げます。



メイン州にあるナブルライトハウス